

「フラッシュバック」

東京都 大山カ也

彼女はよく笑った。何があっても笑っていた。ある昼時、たまたま彼女が私の前に居たことがあった。楽しく会話をしながら私は不用意にプチトマトをほうばった。彼女に見蕩れ過ぎたのかもしれない。油断しきった私の口元から、トマトの種子達が飛び立った。スローモーション。まさにあの時にふさわしい表現だ。やめろ。心の中で叫んだ。しかし、その願いは虚しく、種子達の一部はあろうことか彼女の腕に付着することになる。それまでの生涯最大のミスであった。満開間際の桜が刹那に散る。そんな感じだ。短い人生を賭して謝った。恐る恐る彼女を見た。予想外の展開に混惑するのは私であった。声を押しこらし、口元にしなやかに指を添え、肩で笑っていた。ようやく呼吸が整ったらしく、そして一言。

「なるよね。」

彼女は窓際に座っていた。でも、眩しいのはそのせいではない。そう思ったことを覚えている。

ある時、彼女は失敗をした。耐えきれず泣いていた。避難するどころが、皆、彼女を励ました。涙線を弾かれた彼女はもっと泣いた。その様にもらい泣きする者もいた。最後に彼女は礼を言い、泣きじゃくったその顔に「に〜」と言わんばかりに無りやり笑みを浮べた。その日の暮れ時、私は忘れ物を取りに教室に戻った。入ろうとして引戸にかけた手を私はすぐに離した。彼女が中で泣いていた。そして、泣きながらぼそりと、

「皆、ありがとう……。」

私は、忘れ物をしたことを忘れることにした。帰り道、田んぼの真中で、珍しく独り言を呟いた。

「ええ娘じゃ。」

修学旅行……。2人で写真を撮ってもらった。撮ろう、と彼女は言ってきた。まわりが囁し立てる。一枚だけ、並んで撮った。あの写真はどうしたんだろう。抑えきれずにはにかんだ私と、それに不似合なぐらい本当の意味で豊かだった彼女が写っているのだろうな。

今も、そしてこれから先も、彼女を思い出す度、私はきっと口遊む。あれだけ素敵に笑い、あれだけきれいな涙を流す彼女のことを。

「ええ娘じゃ。」

私は、そんな彼女が、好きじゃ。